

# 離島における後継者の役割と意義に関する一考察

－愛知県知多郡南知多町日間賀島を事例として－

A Study on the Role and Significance of Successors in Remote Islands:  
A case of Himakajima, Minamichita-cho, Chita-gun, Aichi prefecture

林 春 伽

Haruka HAYASHI

日本女子大学大学院人間社会研究科 相関文化論専攻博士課程後期3年

## 要 約

調査地は愛知県に属する日間賀島である。当地は「名古屋から一番近い離島」として東海圏で知名度の高い観光地である。本稿では島内における後継者の役割や意義を論じ、フィールドワークによる実践調査的研究と理論的研究の横断研究を試みた。分析ではR.レッドフィールドの「大伝統／小伝統」を採用し、インターフェースという枠組みを設定した。後継者は島外と島内を繋ぎ、断絶を防ぐ役割を有すると指摘した。インターフェースがもたらすものは単純な労働力のみではなく、現代の観光に関する知識、新しい価値観、アイデア、都会暮らしの生活経験や立ち振る舞い、言葉遣いなど、本人が持つ身体的技能も含むと明らかにした。

さらに、経済活動における生業的意味、地域内での社会的意味、家族に係わる個人的意味の3点から議論を行った。後継者は事業を維持させるだけでなく、島の生活をより安定させるために存在でもありと論じた。

## [Abstract]

---

The survey site is Himakajima, which belongs to Aichi Prefecture. This area is a well-known tourist destination in the Tokai region as "the remote island closest to Nagoya". In this paper, we discussed the role and significance of successors on the island, and attempted cross-sectional research between practical research and theoretical research by fieldwork. In the analysis, R. Redfield's "Great Tradition / Small Tradition" was used to set the framework of the interface. He pointed out that the successor has the role of connecting the outside of the island and the inside of the island and preventing disconnection. The interface brings not only a simple workforce, but also the physical skills of the person, such as knowledge about modern tourism, new values, ideas, living experience and behavior of urban life, and wording.

Furthermore, discussions were held from three points: the business meaning in economic activities, the social meaning in the region, and the personal meaning related to the family. He argued that the successor was not only to maintain the business, but also to stabilize the life of the island.

---

## I. 初めに—研究背景と研究目的, 研究方法

調査地である日間賀島は愛知県知多郡に属し、「名古屋から一番近い島」である観光地だ。東海圏での知名度は高く、観光の島として成立している。筆者がフィールドワークにて実際に島に住み込みを行った際に、所謂後継者の確保の問題を聞き取ることが出来た。これは「家族それぞれで違う現状があり、課題があるから、皆同じってわけではない」が、「誰もが抱える問題」とあるという。このような背景から、本稿では島での後継者問題に焦点をあて、後継者の役割やその機

能を分析・考察することを目的としている。

本稿では、はじめに後継者に関わる先行研究を整理している。その結果、後継者不足を指摘する論文は散見されるが、実態調査的な研究が軸となっている傾向にあり、後継者のもつ役割やなぜ後継者が必要かという議論が不足していることがわかった。したがって、本稿では、後継者を確保することにより島に何がもたらされるかを、インターフェースという人類学的な分析枠組みを設定し考察することを目的とした。

また、筆者は、本稿によって後継者問題に関わる研究の理論的な研究の発展に貢献できると考えている。さらに、本稿をフィールドワークによる実践調査的研究と理論的研究の横断研究と位置付ける。

主な研究方法は、現地でのフィールドワーク並びに聞き取り調査である。加えて、通史的な研究を行うため文献調査も行った。現地でのフィールドワークは2019年2月から始め、現在も継続中である。フィールドワーク期間は日間賀島東里においてホテル業を営むホテルAに住み込みをした。その際、実際に清掃業や仲居業の手伝いを行った。また、本稿では調査地においてフィールドワークで収集した島民の言葉や生活の姿そのものの記述を重要視しているため、「」でそれらを記し、方言で記述した個所もあることを予め明記しておく。

## Ⅱ．研究地概要

### 1. 調査地概要

調査地である日間賀島は愛知県知多郡南知多町に属し、知多半島及び渥美半島に囲まれた三河湾の湾口部寄りに位置している。篠島、佐久島と共に愛知三島と呼ばれ、1957年に離島振興対策実施地域に指定された。日間賀島では通年型観光を目指し、上半期はタイや貝、下半期はフグ、年間でタコやシラスといった海の幸を観光客は楽しむことができる。夏は海水浴やビーチレジャー、バーベキューが盛況である。特にフグやシラスは競争力の高い観光資源として利用されている。多数の化石や、縄文・弥生時代の遺跡、6～7世紀頃の古墳群が存在するなど、古い歴史を持つ島である〔愛知県振興部地域政策課 2018：16〕。この島には2017年度で約24万9千人の観光客が訪れ、島民は島の観光の状況として「島が沈むほど観光客が来る」、「インバウンドに頼らずにやっつけてる」、「それこそゴールデンウィーク、盆暮れ正月は老人も子供も総出で働かないとやっつけていけない」と述べる。島内の産業構造は、主に漁業である第1次産業は4割、水産加工業の第2次産業が1割を切り、残りが第3次産業であるため、飲食・宿泊業の割合が非常に高いことがわかる〔愛知県振興部地域政策課 2018：9〕。また、漁業経営体における漁業専業は半分以下であり、漁業経営体自体は減少傾向である〔同上：10〕。これにより、漁業以外での収入を得る世帯が島内で多く、飲食・宿泊業といった観光業に携わる島民が多いことがわかる。そのため、日間賀島で観光業は無くしてはならない業種であるといえよう。ただし、落合ら〔1982〕は静岡県の新島における観光研究をもとに、島内で行われる観光業について「観光関係アルバイトがさかんであるが、統計などに表われにくく、観光産業を統計的に調査した場合、過小評価されやすい」と論じ〔落合他4名 1982：50〕、観光産業の実態は数字に表れにくいことがわかる。

日間賀島は知多半島最先端の師崎から1.8キロメートルの距離にある。愛知三島は近接しており、日間賀島から南に2キロメートルに篠島、北東3キロメートルに佐久島が位置している。日

間賀島の面積は0.77平方キロメートルで、最高標高地点は30.2メートルである〔愛知県振興部地域政策課HP：2019年9月6日時点〕。愛知県名古屋市中心部から約1時間半で行くことができるため、「名古屋から一番近い島」と宣伝している。河和港、師崎港、伊良湖港からアクセス可能である。

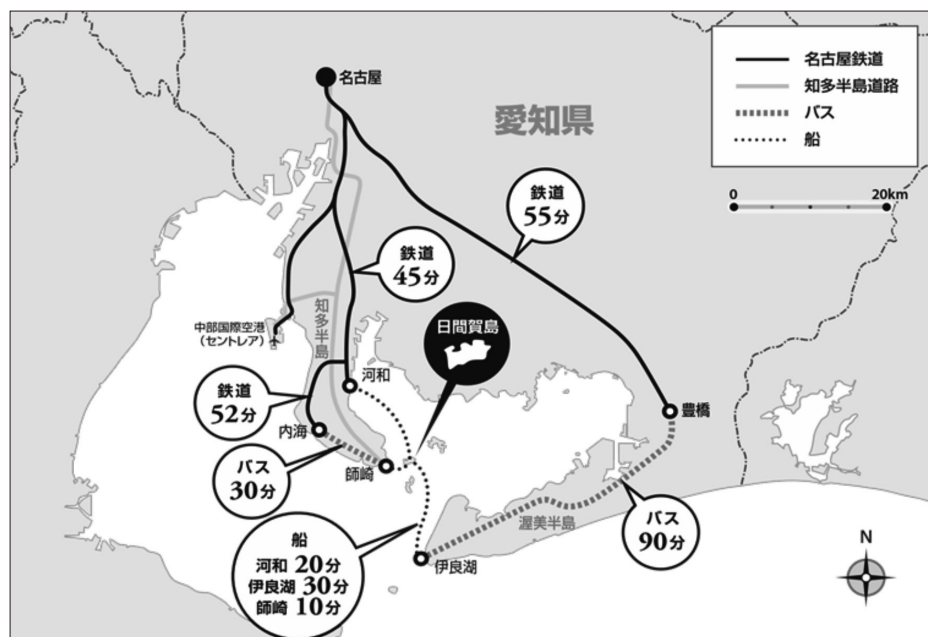


図1 日間賀島へのアクセス方法（筆写依頼：ワークプレス株式会社）

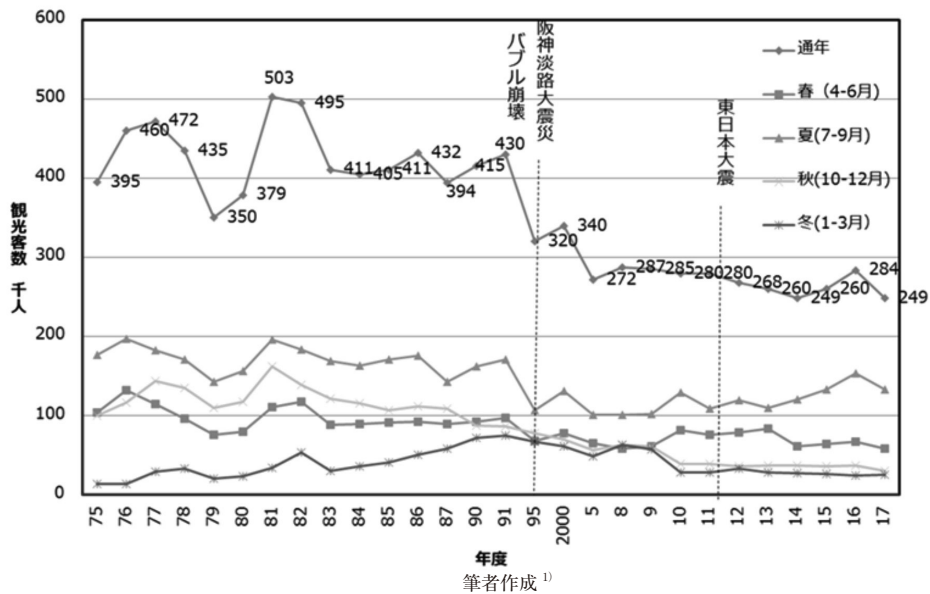
## 2. 観光客数・宿泊施設数

表1は観光客数グラフである。天候や災害の有無、国内の景気など、島内に無関係な出来事が島内観光に影響を及ぼす。実際、2019年9月の聞き取りにおいて島内の宿泊業者は「今年の8月はお盆に台風10号が来て船が欠航した。お盆明けも天気が悪くて売り上げが伸び悩んだ」と天候による売り上げの変動を話していた。

また、バブル経済崩壊(1991～1993)以前と以後では通年の観光客数に大きな差があることがグラフより明らかとなった。聞き取りによると「バブル崩壊後、すぐにお客さんが遠のいたってよりは、じわじわと少なくなった」という。しかしながら、これ以前は数年での観光客数の変動が大きい、以後は変動が小さくなった。バブル経済崩壊後から東日本大震災の数年後の1993～2014年頃は、通年で観光客数は低迷していた。しかし、現在の夏季観光客数はバブル経済崩壊以前の数に近づきつつある。さらに、「今は冬にフグがあるから、お客さんの数が少なくても1人分の払う額が大きい」と観光客1人あたりの支払金額の増加が冬季の売り上げを後押ししていた。

2011年の東日本大震災後は、「オーシャンビューが売りなのに、チェックインしたお客が「こんなにも海に近いと思わなかった」といってすぐにチェックアウトして帰った。海に近いことが逆にネックになった」、「あの年(2011年)は、津波が怖いとか旅行の気分じゃないって行ってキャンセルも相次いだし、売り上げが悪かった。こっちも仕方が無いからキャンセル料をとらなかつ

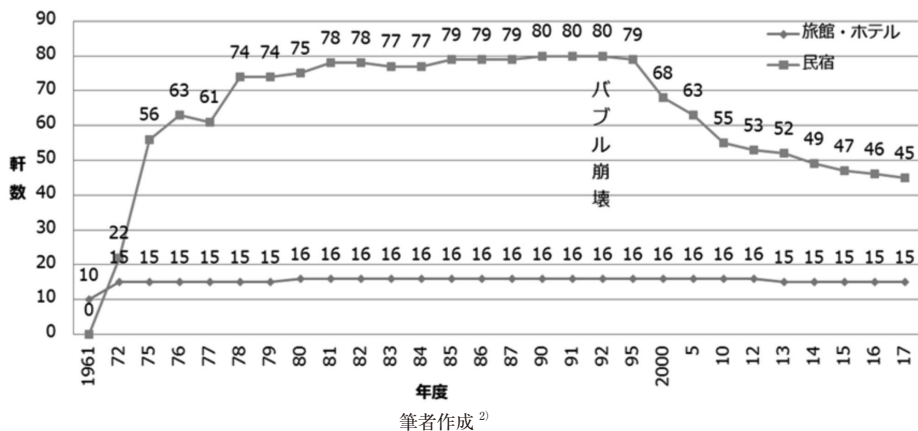
表1 日間賀島観光客数



た」と島や海という環境が観光に悪影響を及ぼしていた。また、「テレビで津波のことをいろいろやるから、震災のあとはしばらく全体的に売上げが悪かった。遊ぶ気分じゃなかったり、海や津波が怖かったり」と数年にわたる災害の影響を述べていた。グラフからも、観光客の津波や災害に対する記憶が新しい数年間は、観光客が全体的に減少したことがわかった。ただし、近年の観光客数は一定数で落ち着いている。

続いて表2は日間賀島における宿泊施設数の変化をグラフ化したものである。日間賀島に対する水道管による配水は1961年だが表2より、宿泊施設数増加には島内における水道管での配水と日本の好景気が影響していることがわかる。実際、1961年には1軒もなかった民宿が、1972年には22軒に増え、10軒だった旅館も15軒となった。宿泊業に関して島民は「水道が引けるようになってから宿泊業が広まった」「水道が引けて民宿が増えた。土日釣り客、海水浴客が来た」と

表2 日間賀島宿泊地数



述べていた。

干ばつが頻繁にあった島では、島民の生活水確保でさえ苦勞したという。そして、水道管普及後、以前より容易に生活水を確保できるようになった。その後、島内では宿泊業を営む人が増えたという。離島において真水の資源は重要である。島民が普段の生活水にさえ事欠く有様である時に、観光客に割く水資源などない。宿泊業は、観光客用の料理の準備から使用後の食器洗い、清掃、大浴場などで一般家庭よりも多くの水を使用する。つまり、当地において宿泊業が発展した背景の1つに、水道管普及により島民への生活水の確保が持続的に可能となったこと、つまり離島で宿泊業を行う基盤が作られたことが挙げられる。この件に関し、当時を知る島内の宿泊業者(80代)に聞き取りをしたところ、「水道が普及したら、みんな民宿をやりだした。それまでは、大きい井戸を自前で持っている所が宿(行商人を泊めるなど)をやとった。(大きい井戸をもっている所に)水がない人が水をかけてもらいにいったりもした状態で、生活水にも事欠く有様だった。水には難儀した。井戸の底が見えとるときには、普通の釣瓶じゃあ水が汲めんで、小さい缶に紐を括り付けて少しずつ水を汲む時もあった。その時代(水道管が普及した頃)はいわゆる民宿ブームが来てたし、調度いいから「じゃあちょっと民宿でもやるか」ということになった。水が来て生活が変わった」と語った。

その頃、日本は高度成長期に入り、当地において民宿や海水浴が流行したという。バブル景気の際は、ホテルや旅館が流行したため、その時期に「区画整理でまとまった土地を手にするなど、稼いでいたところや立地が良かったところは、旅館やホテル形式に変えた」という。バブル経済崩壊後は徐々に民宿数は減少した。ただし、現在も島内1周約6kmの島に、60の宿泊施設がある[愛知県振興部地域政策課 2019:36]。

### III. 先行研究の整理と本研究の視座について

#### 1. 後継者に関する先行研究

本節では、後継者に関わる先行研究を整理したい。ただし、漁業経営は基本的に漁師中心の男性の商売である側面が強いため、家族経営の後継者に関わる先行研究は農業経営に関する研究が絶対量が多く、研究実績も豊富である。そのため、引用文献に農業研究が多いことを予め記しておく。

近年の論文においては、文化や伝統技術を継承する後継者や若者が不足し、それらを課題とする論考が散見される。また、観光事業を後継者問題解決策として取り扱う論考が多い。伝統文化継承の観点からすると、秋田を代表する観光資源に、ユネスコの無形文化遺産に選ばれた「男鹿のナマハゲ」がある。根岸・長谷川 [2019]によると、本行事は、本来地元青年会によって担われていたが、少子高齢化により後継者が不足し、観光客や外国人等の外部参加者の受け入れを始め、観光資源化した[根岸・長谷川 2019:65]。地域住民の高齢化のみならず過疎化、さらに保存会メンバーの高齢化が深刻である現状を鑑みると、行事そのものを存続させるためには新しい取り組みが必要であると考えられる。また、外部者参加を進めたことにより、過去にナマハゲ行事が途絶えた地区でも復活させようという動きも始まった [同上:75]。地域の文化継承の担い手は、当地の過疎化や都心部への若年層の流出、少子高齢化などの影響を受け減少傾向である。その対策として、祭祀や儀礼を観光客に公開することで、観光客の中から後継者を見つけ出すほか、当

地以外の出身者から後継者を育成するなど、各地域は後継者確保に対し工夫している。加えて、大晦日の家族団欒を重要視して行事の受け入れを拒む世帯や、個別の家ではなく旅館でのナマハゲ行事見学を希望する世帯も出てきており[同上：75]、そのような人々の生活の変化にも対応している。時代の変化や地域住民のナマハゲに対する意識の変化を読み取り、柔軟に対応し、文化継承を促進するためにも、次世代の後継者確保が必要であろう。

次に、人材確保の視点で先行研究を整理したい。近年、観光の1手法としてグリーン・ツーリズムや都市住民との交流事業が注目されている。しかし、朝水によると「せっかく定着した農村体験型の交流事業も高齢化が進んだ地域では労働力と後継者の不足が大きな問題になっている」という[朝水 2016：100109]。村部で活躍する都市出身の若者支援として「緑ふるさと協力隊」(1994年度)や「地域づくりインターン」(1996 - 1997年度試行, 2000年度から運用)、大学生による地域おこし協力隊など様々であり、全国に展開している。朝水[2016]は、このような農村部への公的人材支援は「元々少子高齢化に伴う地方における人材不足を補うために創められたが、地域おこし協力隊に関して言えば、一次産業の支援策よりは、観光産業などの地方で不足する人材の確保のために機能していると考えられる」と論じている[朝水 2016：100109]。

政府主導の地域おこし協力隊などに対しては、その効果が疑問視されるケースもある。しかし、地域活性化や街づくりには、その土地の後継者となりうるような若年層の人材確保が必要とされているのは事実であろう。また、外部から人々を受け入れることにより、新たな知識や技能、価値観を当地に受け入れ、時代に即した地域活性化を狙う自治体は郊外を中心に益々増加すると予想できる。その際に、観光業を足掛かりとして地域に人々の交流を生み出そうとする動き自体は不自然ではないと考えられよう。

加えて、伝統技術を観光資源化することにより維持・継承させようとする動きもある。出口[2018]は、木造船の技術文化の保持、継承、後継者育成という課題に対し、木造船を観光業に利用し、遊覧や船祭りとして木造船の船造りや船利用の再生産することを論じている[出口 2018：190]。論文内では「漁業のような生業や、貨物などの運搬船としての木造船は衰微し、FRP船や鉄船に転換されたとしても、その土地の歴史や伝統文化を味わうには「木造船がいい」という価値が観光には活かされる」と述べられている[出口 2018：187]。木造船文化継承に観光事業が有効な手段とされ、観光業に文化継承を汲み込むことで、技術継承や保持、後継者育成という課題を解決できる可能性を示している。

伝統技術は、従来において特に観光業を利用せずとも保持や継承されてきた。ただし、人口減少、都市部への若年層の流出などの要因から無条件に文化継承が行われないならば、それらに対する対策として観光という要素を活用する事例はもはや珍しくない。観光業を利用し、伝統技術を後世に残し、後継者を確保する提案からもわかる通り、観光業は裾野が広く、応用力も高く、多職種とも共存可能性が高いとみなされていることが伺える。

次に家族経営の視点から後継者問題について述べたい。時代や生活の変化と家族経営の関係性、後継者確保の重要性については1980年代から研究テーマとして扱われ、注目されてきた<sup>3)</sup>。ただし、これらの先行研究が発表された1980～1990年代と2020年の現在では、前提とする社会情勢に差があると判断したため、ここでは、2000年代以前の研究を投影した2000年代以降の研究を先行研究として取り扱う。

農業における後継者問題について研究した金[2009]は、家族経営は農業における代表的な経営形態であるといえるが、近年の家族関係の変化による内部的要因や市場での競争力の求められる外部的要因により、後継者不足が問題となり、家族経営の生産性や効率性が家族経営の存立の課題となっていると述べる[金 2009:21]。家族経営の課題として「家族経営の後継者問題は深刻である」と述べ[同上:22]、「企業経営に比べての家族経営の零細な規模やそれによる労働負担の過重さ、利益の低さは確かに潜在後継者を誘引するものとして問題がある。また家族経営の家産・家業としての概念も、潜在の後継者である若者の価値観の変化からみると、魅力的であると言い難い」と後継者不足の背景を指摘した[金 2009:23]。

さらに、家族経営者の後継者確保について、白田・大村・藤井[2012]はオーラルヒストリーという手法より、都心部の商店街でさえ後継者確保は安定数にならず、商売の形態も観光客や若い女性など、従来の商店街の顧客層以外に焦点を当てた経営に転換していることを明らかとした[白田・大村・藤井 2012:719]。論文内では、今後経営を続けたい店舗は、時代変化に個別に対応し、積極的に経営改革を行う店舗と、経営改革には消極的だが可能な限り継続意向のある店舗の2種類に分けられると論じられている。前者は、都市変化に対応し、生き残りを目指す店舗であり、観光客の受け入れ態勢を整え、商店街の変化に対応している[同上:720]。さらに、このグループは、経営者が若年層である店舗あるいは後継者が決まっている店舗に多いという[同上:720]。反対に後者は、経営改革に消極的であり、経営において大きな収益を望んでいるわけではなく、近隣住民へのサービスという側面が強い[同上:720]。ただし、そのような店舗は店主が高齢者であり、後継者が不在である場合が非常に高く、廃業に追い込まれることも容易に想像できる状況である[同上:720]。

つまり、後継者の有無や若年層への世代交代は、各店舗の経営改革や時代、客層の変化に対応できるかに直結している。家族経営の後継者確保は、経営の方針を決定し、経営者が持続的経営を希望するか否かの極めて重要な条件であるといえよう。最後に、白田・大村・藤井[2012]は「今後、地域独自の魅力の創出には家族経営型店舗の存続が重要であるものの現状の守旧的保存・継続には限界があることから社会環境の変化に柔軟に対応することが今後ますます重要になってくる」と論じている[同上:720]。

各分野において後継者不足を解消するために観光業を活用するなど、観光業を使って後継者不足問題を改善しようという動きがある。逆説的に言えば、旧来の家族経営や労働内容、経営指針に観光業を組み入れることで、自らの行う事業がより魅力的かつ親近感のある事柄だと若者にアピールすることができるだろう。各調査対象地域の人々は、後継者確保の布石として観光業は相性が良く、さらに持続的な経営方針とも融和性が高いと考えていることが明らかとなった。

## 2. 調査地における若者の流出・後継者問題について

本節では、島内における後継者問題についての予備調査的立ち位置として情報を整理する。初めに、瀬川清子(1895-1984)の『日間賀島民俗誌』[1951]に記述された若者の移動に関する部分を記述したい。本調査地は観光地であり、持続可能な観光のために人的資源の確保は重要であろう。本調査地では、人的資源の確保とは島民の確保と同義となる。島内では家族経営が多く、従業員は家族や親族である場合が多い。そもそも流動的に人々が移住する土地柄でもなく、人的資源が有限である離島では、親の家業を継ぐことは当たり前ととらえられる傾向にあり、若者の流出は

当地の後継者不足を加速させることと同義である。

聞き取り調査によると若者の島外流出、後継者不足は重要な問題であるという。ただし、これは今になって始まったことではない。『日間賀島民俗誌』には「かういふ風に観光道路が出来るような時代になっては、どこの家でも、昔のまま漁と少しの畑作では暮らせなくなったので、娘や二、三男は名古屋其他の都市に出てゆく、といふ風でどこの家でも島外に触手をのばして収入をはかっている。昔は、島中が一緒に豊作を喜び、一緒に不漁を嘆くだけで、ただそれだけの運命だったのに、今は広い世界を泳いで、生存競争をしなければならない」と記述され、戦前から若者は島を離れるケースが多かったことがわかる[瀬川 1951:49]。調査地において若者の流出は現代に始まったことではなく、戦前より確認できた島の姿であった。瀬川が日間賀島の記録を行った1938年は島内において生業と呼べるような観光業は行われていないことが、筆者の他論文により明らかとなっているが<sup>4)</sup>、島内では戦前より若者の流失は存在した事象であったことがわかった。

近年は地域主体型観光の意識が高まっている。地域主体で観光を行い、観光業により地域が発展すると、若者の流出を防ぎ、地域活性化につながるといわれている。小林[2011]は「観光による交流人口が増えれば、新しい雇用機会が生じる可能性もある。地域が輝いてくれば、若い人たちがふるさつを見直し、Uターンしてくることも多くなるに違いない。理想は、その地域で育った子どもたちが、自分のふるさつに誇りを持つことができるようにすることである」と述べる[小林 2011:153]。

ただし、この点に関し、筆者が聞き取りを行うと、40代の宿泊業女将は「子供に(商売を)やらせるように親が「この商売は素晴らしい」って言い聞かせて、地域の盛り上げは地域でやっているなんていうやり方は所詮きれいな事。そりゃ、働く身としては忙しいし、体も動かなくなってくる時に、子供が帰ってきて手伝ってくれたら嬉しいし、戻ってきてほしいなって思う。でもね、親としては複雑。だってこの商売は大変だから。それと同じように子供もなるのかって思うとね。商売をやる者としては人手が確保できるほうが嬉しい。でも親としては100%喜べない。心配」と述べた。観光業を家業として家族経営を行う場合、従業員はほぼ家族か親族となる。親側には、経営者視点で若者を人的資源として確保したい一方で、親として子供の将来を心配するという2面性が確認できた。島内において後継者確保は重要な問題と言われるが、この点に関し、「島に帰ってくるかどうかはその子の性格。昔は、男の子は漁師、女の子はお嫁に行くものだったけど、今は違う。家ごとに問題や課題がある」と島内で宿泊業を営む女将(50代)は述べた。家族経営が主体となると、家族構成員の病気や身体障害、離婚、家庭内不和といった、一見経営に無関係な要素が、経営に直結する問題に繋がることもあるという。問題の解決方法は各世帯で異なるが、「その人の性格による」そうだ。

加えて、聞き取りの際、筆者が「自分の家の商売が稼げるなら子供は後を継ぐ気になるのではないか」という問いに対し、島民からは「そうでもない」と返答があった。島内の観光業では基本的に島外から来る観光客が支払う金額が売り上げである。観光客が増えれば、その分売り上げが増加する。ただし、観光客が多くなるということは、島外が好景気であることだ。そうなると、若者は島外により良い仕事を求め、流出するという。島の老人(80代)は「(会社で)うんと辛くしてもらって、やっぱり島がええってなってくれたほうが戻ってくる」と述べた。後継者問題は、



調査地における具体的な統計データが存在しないため、島民の言説による、主観的な感覚に基づくことが否めない。しかし、少なくとも島民は「一概に、地域型観光業が発展すると、後継者不足や若者の都会流出が解消されるというわけでもない」と考えていることが聞き取りより明らかとなった。

#### IV. インターフェースの設定と先行研究

##### 1. インターフェース—分析枠組み設定—

本節では、インターフェースという分析枠組みの設定背景であるR.レッドフィールドの「大伝統/小伝統」の概念ならびに使用理由、インターフェースの定義を説明する。

フィールドワークを行った際、島内：島外＝田舎：都会であり、「ここは田舎だから」「都会から来てくれる」「私は名古屋出身の高嶺の花だった」などの言説があり、島内：島外＝田舎：都会という対比が確認でき、単なる生活空間の異なりだけではなく、若干の上下関係のような心情や不可視の格差が島内外で存在し、住民がそれを自覚していることがわかった。

そのような背景により、本稿では、社会人類学者ロバート・レッドフィールド(1897－1958)の『文明の文化人類学』[1960]より「大きい伝統」と「小さい伝統」の概念を使用する。これにより、単なる空間的な隔たりからくる対比構造ではなく、上下関係を前提とした分析を行うことができると考え、本概念を使用した次第である

この上下関係を前提とした文化区分をR.レッドフィールドは以下のように述べている。

農民は田舎者であり、それを承知している。生活の一部が地方の地域社会に、また一部が一少なくとも精神的に一いつそう都市的な圏内にある教育を身に付けた人々が、農民を上から見下している。(中略)世界中どこも同じだが、都市民が農民に当てつけたその言葉は、蔑視、卑下、あるいは一そしてこれは態度の反対面であるが一質素、古風、大胆といった徳目に対するある称賛を暗に含んでいる。農民は文化や生活様式については、自分たちの側に相対的に劣等感を認めているが、農民にあたえられた徳目をおのずと主張する。そして都市民を怠惰、欺瞞、奢侈なものとしてみる。農民は共通な文化に関しては、自身を低いものとしてみるが、にもかかわらず生活様式については、道徳的に都市民の生活様式にまさっているとみている。[R.レッドフィールド 1960：70－71]

はじめに、これは1960年に発行された文献であることを付け加える。実際に、島に住んだ経験では、現在はネットインフラ環境等の発展により、確固たる情報格差は感じられなかった。ただし、道徳などの内発的な心情がどこまで住民に蓄積されているかは数値的処理が不可能であり、事実、フィールドワーク中に島内：島外＝田舎：都会という意味合いの言説は幾度となく存在した。したがって、以下文章では島内：島外＝田舎：都会という対比構造を前提に議論を進めたい<sup>5)</sup>。

このような心的把握に関し、R.レッドフィールドは「大きい伝統」と「小さい伝統」という枠組みを提唱した。

我々は「文明」という特別の言葉をうける価値のあるこの複合文化の心的把握をどのよう

にして始めたらいいだろうか。(中略)文明には、内省的なごく少数者の大きい伝統があると同時に、主として非内省的な多数者の小さい伝統がある。大きい伝統は、もろもろの学校ないしは寺院で培われているが、小さい伝統は、村落社会の無学な人々の生活の中で、それ自体を完成し、そして維持しつづけている。哲学者・神学者・文学者の伝統は、意識的に培われて伝えられた伝統である。一方庶民の伝統は、大部分当然の事として受け取られているものであって、精緻な吟味、あるいは反省された洗練や改善にゆだねられたものではない。[R. レッドフィールド 1960: 76 - 77]

そして、これら2つの伝統に対し、「二つの伝統は相互依存的である。大きい伝統と小さい伝統は、長い間相互に影響し合い、今後もそれをつづけるだろう。(中略)大きい伝統と小さい伝統は、区別できるが、しかし永遠に相互に流れこみまた流れ出る思想と活動の、二つの流れとして考えられるのである」と同著内で論ずる[R. レッドフィールド 1960: 77 - 78]。加えて、「農民地域社会の文化は、自律的ではない。その文化は、それが一部分である文明の一樣相ないし次元である」として、小伝統形成・維持に関して以下のように記している。

農村文化は自己を保持してゆくために、地方の地域社会に対して、その外部におきる思想の絶え間ない伝達を必要としているということである。農民村落の知的な、そしてしばしば宗教的、道徳的な生活は、永久に不完全なものである。農民から離れたところにいる教師や牧師、あるいは思想家の心の内に何が往来しているかを知ることは、研究者たちにとっても必要なことである。それはかれらの考えが農民に影響を与え、またおそらく農民がかれらの考えをうけいれるからである。「同時性的な」体系としてみるならば、農民文化は、村人の心の裡に進んでいることからだけでは十分理解出来ない。[R. レッドフィールド 1960: 76 - 77]

その際、双方の伝統区域間を「都会的な圏内にある教育を身につけた人々」が行き来することで[R. レッドフィールド 1960: 70]、大伝統社会の知識が小伝統社会に伝達すると論ずる。教育を身につけた人々をレッドフィールドは「地方生活といっそう広い生活との間の行政的、文化的媒介者」とし、基本的に「市長、医師、学校の教師」といった公的機関による高等教育を受けた「インテリゲンチヤ」が担うとされた[R. レッドフィールド 1960: 67 - 68]。

ただし、本調査地においては、実際に高学歴でなくとも「島外での生活経験がある」「都会出身である」などの人間が、レッドフィールドの述べた「インテリゲンチヤ」に等しい役割を果たすことがわかった。そのため本稿では、公的機関による高等教育経験や技術習得にとらわれることなく、広く「大伝統と小伝統という異なる2つのものを仲介する存在」として「インターフェース」という概念を設定したい。ここでいう大伝統とは島外のことを指し、小伝統とは島内を指す。

「インターフェース」は、そもそも英語の「Interface」が由来となって作られた言葉であり、基本的にコンピューター業界やIT業界で使用されるビジネス用語である。『IT用語辞典』の「インターフェース」の意味は本来「接点、境界面、接触面、接合面、仲立ち、橋渡し」であり、「二つのものが接続・接触する箇所や、両者の間で情報や信号などをやりとりするための手順や規約を定めた

もの]を意味する[インターフェース <http://e-words.jp/> 2019年6月14日時点]。

## 2. インターフェースにおける先行研究の整理

以下に、他調査地を研究対象とした、主に漢民族の事例として、女性がインターフェースとしての役割を果たしていると考えられる先行研究を整理したい。中国は日本にとって近隣の文化である。基本的に父系社会の中で、男性の地位が高く、父系性が強いとされている。そのようなフィールドでさえ、女性がインターフェースに成りうる事例があることが先行研究として好例と考えた。

宮原[2005]によれば、東南アジアの女性の経験世界—中国系女性と中国系の男性と通婚する女性が、いかに異なる仕方で移民社会の再生産に関与するかを現地調査にもとづいて明らかとし、女性同士のコミュニティの中で文化交流が行われ情報が伝達されることを指摘している。

上田[1996]は、婚姻関係を1つの接点として設定し、「同族による形容詞な人間関係による柱と、女性を介した動詞的な関係が社会を支える形で進んでいる」として [上田 1996: 21]、女性の婚姻による移動を媒介とした関係性を明らかとしている。

さらに上田[2006]は、ペスト蔓延という危機的状況下の同族集団の移動状況を分析した。その結果、「危機回避の方法として妻や母の実家に逃げたために、その村にペストを感染させてしまった」という事例から、「社会が個人活動を進める際により所を与える親族は、父系の同族ではなく、母方の婚姻や姉妹の嫁ぎ先の家族である場合のほうが多い。危機的状況下で個人の安全を保証するものは、父系の同族関係ではなく、婚姻関係である」と結論付け [上田 2006: 96]、父系出自原理の中において女性の移動による婚姻関係が役割を果たすことを明らかとした。同族結合という父系社会の中で、女性は排除されているにすぎないとみなされる傾向にあるが、女性を媒介とした親族のつながりは危機的状況下において必要であり、父系社会で内在化していることが上田の研究により明らかとなった。

植田 [2000]は、漢民族の親族研究において女性の存在が深く議論される機会がない背景から、女性を婚姻によって夫を親や兄弟とつなぐ存在としてとらえ、女性が介入した関係、父系以外の関係から、漢民族の親族・婚姻体系を再考している [植野 2000: 1-2]。植野は父系出自社会における女性研究に対し、「父系関係以外の他の親族的関係や、婚姻で結ばれる家族関係、さらに女性自身に対する研究は、近年に至るまで、補足的な位置付けに留められ、姻戚関係も「補足的」な関係として意味づけされていた」ことを女性研究の課題として言及している [同上: 365]。

また、植野 [2000]は「父系出自と対置的に婚姻関係をとらえるのではなく、父系出自に不可欠な存在としての婚姻関係が存在しているという視点」で分析を行い、「台湾における婚姻関係は、父系出自の連続と家族展開に、儀礼的・経済的に深く関与している」ことを明らかにしている [同上: 16]。さらに、男性にとっての婚姻関係と、女性にとっての婚姻関係との差異を明確にし、「男性にとっては、特に家族を超えて社会活動や儀礼的行為に、女性にとっては、家族内の関係に婚姻関係が大きな意味を持っている。こうした差異も婚姻関係の機能や展開の原理と関連したものである」ことを明らかとした [同上: 16]。このように、父系社会内においても、女性はクランやリネージを移動するだけの存在ではなく、婚姻による新たな社会の中においてインターフェースとしての役割を有している。また、父系社会内で単なる「出産する機械」としてではなく、婚姻による女性の移動や、父系の連続は、「女家」の祈願と援助によって支えられ [同上: 369]、祖先祭祀や女性の実家からの経済的援助など、必要不可欠な役割を有していることがわかる。

また、経営の継承問題について、斎藤 [1997]は「現在の変化の激しい社会情勢のもとで、親が子に継がせるに値する経営(家業)をつくることは、困難が多いであろう」述べ[斎藤 1997:33]、「子に新しい経営をつくる力を養わせ、それを実現に移すための契機を与える環境を醸成したほうが、ずっと容易であろう。後継者を育てることの意味は、単に相続者としてではなく革新者(イノベイタ)として育てることに、その本質がある」と論じた[同上]。

本稿では、「経営能力」や「高等教育」といった個々人の能力や利点にとらわれず、とりたてた資格や技能を有していない存在も「インターフェース」として分類する。あくまで、「公的な教育機関での教育経験の有無にかかわらず、島外の情報を島内に伝える役割を有する存在」として、インターフェースという言葉を使用したい。

#### IV. 聞き取り結果・分析

ここでは、聞き取り調査により得た情報を「後継者」・「女性」という2つの視点に分けて記述する。「後継者」の設定理由は、現在の日間賀島は島内結婚も存在するが、基本は島内出身の男性と島外の女性が結婚時に島に移住し、若年層世帯をつくり、後継者となる場合が多いからである。また、「女性」では主に日間賀島に嫁いた女性が島にどのような影響を及ぼしてきたかを記述する。

##### 1. 後継者

島内の結婚について、島の女性(60代)は「20歳そこそこで結婚して親になる子と、結婚せん人で2分化されている。だもんで、40代で孫ができる人と、いつまでも子供が結婚しない人でわかれる」と述べた。また、日間賀島の結婚事情に対し、島の観光協会は「みんな25歳くらいまでには家族を持つ。自分の家族が欲しいって思うのが外より早いと思う」と述べた。また、「衣食住は島にもうある状態だし、基本生きていけると思ってるから、先のことをそんなに深く考えなくて結婚できる」との意見もあった。後継者候補の有無は各家庭で異なる。現在、子供が大学生以上の家庭は、後継者確保が現実問題となる。この点に関し、子供が大学生である島民に聞き取りを行うと「若い時じゃないと帰ってこれないと思う。大変な商売だで覚悟しろとか言っても若い子にはわからんし、覚悟できんと思うけど、だからこそ帰ってこれる。意味がわかるようになったら帰ってこれん」、「親はどんな選択を子供がしても心配なことにはかわらん」と述べた。

現在、島内の観光業を支える人々に筆者が家業を継いだ理由を尋ねると、男性は元々家業であった場合が多く、女性の場合は嫁入りが多かったという。女性の場合は島外出身か、島内出身かで状況は異なる。また、兄弟姉妹の中でも誰が家業を継ぐかといった問題は、各世帯のきょうだい構成や性格によるという。聞き取りでは、30代宿泊業若女将は「今は本人次第。旦那は祖父母から「お前がこの跡取りだ」と言われて育った」と述べた。加えて「お姉ちゃんがいたけど、島から出ていったから、私がやらないといけなくなった。本当は、普通のサラリーマンの嫁さんになるのが夢だった」(50代宿泊業女将)、「本当はやりたくなかった。親の姿を見て、大変やし、忙しいし、客商売やしで。でも仕方ない。生活せなならんで」(50代宿泊業女将)と様々な事情があることがわかった。

インターフェースとなる人間は主に、島外の生活経験(進学や就職を含む)がある島内出身者が前提であるが、「男の子は比較的帰ってくるが、女の子は9割帰ってこない」という島民の意見から、島内出身の男性と島外出身の嫁という組み合わせが一般的とされている。これは「男の子

の跡取りだと本人も戻って気易い。お嫁さんをもらう側だから」という島内の現状を加味し、現実的なパターンであろう。

フィールドワーク中に分かったことは女性の労働力の必要性だ。そのため、女手が必要不可欠ならば娘を後継者にした方が効率的ではないのかと疑問を持つが、その点に関して現在の女将たちは「従業員のフォローも女の人がしていけないといかんし、家の中で仕事以外のやることが多いし、気苦労もあるし、それを娘がやるのかってなると、普通にサラリーマン家庭の人と結婚したほうが、とも思う」、「男の子の跡取りだと本人も戻って気易い。お嫁さんをもらう側だから。男の子は戻ってくるけど、女の子は戻ってこないっていうのはそういうこと」と述べた。また、「息子が継いでくれるっていうのは嬉しいけど、嫁が来なかったらと思うと心配。女手が絶対にいる商売だ。嫁が必要になる」というように、自営業の職種や島内の常識が嫁不足に拍車をかけるのではないかという自覚は持っていることがわかった。島内での後継者問題と嫁の不在は常に課題であるという。

家族経営では、労働力の大半が家族である場合が多く、さらに生活を共にしている場合、サラリーマン世帯とは家庭環境が異なる。企業の宿泊業に雇用されている場合とは異なり、経営と家族の在り方さえも、労働と生活に結び付き、不可分であるといえよう。

一方、単純に若年世帯が増加することにより、「浜根性(西浜と東浜では性格が違うといわれる)のせいでいろんなものを建てる時、争うことがしょっちゅうだった。今は、西・東ではなく島を上から見て考えないといけない。それができるのも世間の若い人や嫁さんのおかげ。(浜根性を有していないから)島全体のことを考えることができる」というようなそもそも島特有の気質を有していない視点を若者が伝えている事例があるとわかった。

## 2. 女性

現在、島で暮らす女性たちに聞き取りを行った。結婚当初のことについて、「最初から私たちが頑張るんだって思ったわけじゃない。若さと勢いで乗り切った」(30代宿泊業若女将)「20歳で結婚して、21歳で1人目を産んだ。今思えば早かったなって思うけどね。(その時の自分は)何も知らん子供だったけど、だからこそやってこれたとも思う。若さでがむしゃらにやってた」(30代宿泊業若女将)と述べる。また、「昔は結婚しないことも許されない時代だったし、女の人が外で働き続けるって時代じゃなかった。嫁入りしたら嫁入り先で頑張るって感じだった」(40代宿泊業女将)、「結婚した相手の家業だった。自分はそもそも接客業が向いてないと思う」(50代宿泊業女将)、「えらい(「辛い」の方言)ところに嫁に来てしまったって必ず思う。でもここでやっていくしかない、もう戻れない、私が決めたことだからって思って毎日必死だった」(40代宿泊業女将)、と述べた。

日間賀島での女性の労働の変化<sup>6)</sup>は、第1期(明治期～戦中):漁業・農業、第2期(～1950年代前半):絞り業<sup>7)</sup>、釣り客、弘法参り<sup>8)</sup>の参拝者を対象とした商売、第3期(1950年代後半～1970年代):民宿ブーム、第4期(1980～1990年代):旅館・ホテルブーム、第5期(2000年代～現在):総合的な観光化、の5期に分けることが出来る。以下、この分類に従い、筆者が収集した情報から女性、特に嫁という立場である女性に着目し、記述を行い、女性のインターフェースとしての役割に注目し、聞き取り結果の記述を進めたい。

第1期において女性は婚姻により、島では蓄積されにくい農業の知識を齎す存在として役割を

担ってきたという。聞き取りによる「お嫁さんに渥美の百姓出身の人が多かった。それが島内結婚が普通だった。三代の間に家に渥美の人が入っていない家はいない、と昔はいわれているぐらいだった」(80代女性)だったという。言説に登場する愛知県の渥美半島は農業が盛んな土地柄である。実際に「お百姓の家からお嫁にきたり、婿にきた人が(畑のことを)教えてくれる。島の女の方は絞りをやっていたから、畑のことなんてわからない(何をいつ、どうやって植えていいのか)。それを島に来た人が教えてくれたり、手伝ったりしてくれた」(80代女性)、「自分(70代男性：漁師)の母も渥美の百姓出身で、昔は嫁をもらうときは渥美からというのが当たり前だった。嫁が百姓出身だから野菜類は自家製。近所や友人に分けたりもする」(70代男性)、「漁師に百姓の娘がお嫁に来るから出来ていた。農業のやり方を農業出身の嫁が教えてくれた」(80代男性)とのことであった。この時期は観光業と呼べるような産業化された体制は整っておらず、島に来る行商をもてなし、賃金をもらう程度であったという。このように、観光が島で発展する以前は、島外の人々が島には無かった農業の知識を婚姻により島内にもたらしけていたことがわかる。

第2期では、絞り業や水産加工業、また弘法参りにより島外から来る人間相手、つまり、島外の人々を商売相手として労働を行い始める時期である。実際に絞り業を現在でも行う女性(70代)によると、「島の外の人と値段のやりとりや交渉を行わないといけない。だから島の方言では無く、標準語をしゃべれないと損をするかもしれない」と述べ、島外との商売を通じて、訛りのない標準語を身に付けたという。これは、島では自発的に生産できない身体技能の1つと言えよう。

ただし、時代を経て都会への若年層流出が拡大すると、1980年代～90年代では「渥美半島からお嫁に女の人が来たのは45年くらい前で最後だった。自分(70代男性)が嫁を貰う時に、「渥美にはもうお前んとこにやる若い女はおらん」と言われた」という状況に変わる。第3期～現在にかけては、観光地として島が成立し、東海圏において知名度を獲得したためか、「名古屋や尾張の街の方から嫁が来てくれるようになった」といい農家からの嫁入りは終息したという。

観光業においてもインターフェースの役割を果たす事例がある。2000年代前後に結婚により島へ移住した女性によると「私(40代女性：漁師の妻、旅館業パート)がお嫁に来た25年ほど前は考えられなかったけど、今のお嫁さんは自分のやりたいことをはじめる。アイス売ったり、スイーツ売ったり、最近古民家を改造してエステとか。家でちょっとしたものを売るようになった。自分の技術を島に還元している。(お嫁さんが)やりたいことをやって結果的に島が良くなればいい」と言い、「現代風の観光」の方法や企画・運営を行うという。実際に、エステティシャンや介護福祉士の資格を活かし、島の中で商売を行う事例や、既存の事業から派生させ、カフェやお土産屋など新規事業を行う事例もある。基本的にこれらは島の女性たちが行き、新しい観光資源となっているという。さらに、結婚前の仕事の経験や資格を、島の観光へ還元するなど、インターフェースの役割を果たしている。また、「若い世代」「外からやってきた」という肩書きにより、新規事業を行いやすいという一面もあるという。

さらに、「島外出身である」人間の供給する知識自体がその立ち振る舞いや雰囲気といった極めて抽象的なものである場合もある。聞き取りでは「今は、都会のお嫁さんが日間賀を変えてくれる。だから生き残れる。日間賀弁が良かった時代もあったが、日間賀の娘さんがフロントで接客するのはどんくさい。それにある程度の年齢の人でやるべきだと思う」「島出身は島しか知らない。でも観光客は外から来る。外で何が売れているのかとか流行っているのかは島ではわからない。

若い人やお嫁さんが新しいものを入れてくれると、それで観光客が来てお金を落とす」「名古屋の子や都会の子で、そこから来たお嫁さんの方が垢抜けている。島の中でしか生活してないと、みんな知り合いだから、外に出るときも化粧をしなかったりするけど、やっぱりお化粧してきちんとした方が観光客相手にはいいと思う。都会出身の子だとそれが普通にできる」といったように、島外での生活経験で身に付いたものが島内に還元されているという。これは観光業にも生かされ、実際に、「時代によって儲かる商売が島のなかでも変わってきている。コンビニができたり、車が走るようになったり、生活も変わった。嫁さんが日間賀を変えてくれている。水は流れないと濁るように、新しいことを取り入れないと島はすぐに駄目になる。若いお嫁さんが都会から来てくれるから時代に取り残されないようになっている」という。基本的に、島内出身である男性に、島外出身である女性が嫁ぐ形が一般的である島の中で、女性本人が意識しているか否か別として、女性は島外の知識や習得した立ち振る舞い、言葉遣いを島内へ伝達する存在として機能を果たしていることが分かる。以上、筆者が収集した情報から女性、特に嫁という立場である女性に着目し、本節の記述を行った。

## V. 考察と結論

### 1. 考察

本稿では、後継者は基本的に「都会：田舎＝島外：島内」の関係性の中で、島外と島内の共存を実行するインターフェースとして役割を果たしていることが明らかとなった。

本調査地の場合では、おおよそ島外(＝都会)からやってきた、島の新たな構成員にその役割が期待され、実際にそれらは実行されていることが聞き取り調査より明らかとなった。後継者の確保や婚姻に伴う女性の移動により、情報や技術、知識を伝播するインターフェースを獲得していると言えよう。加えて、インターフェースが島の存続、家族経営の基盤となる。伝播される技術が島の存続に繋がり、ひいては観光業の発展にも繋がることが明らかとなった。

以下には、インターフェースの持つ意義について、経済活動における生業的意義、地域内での社会的意義、家族に係わる個人的意義という3つの視点から論じてみたい<sup>9)</sup>。

はじめに、経済活動における生業的意義である。ここでの経済活動は、観光業に限定したことはない。主に、島内の家族経営者(漁業、水産加工業、観光業など)にとって、家族は従業員とほぼ同義となる。世帯で経営方針や事業形態は異なるが、家族経営に対する見解として、経済人類学的視点では、「私たちはその世界に家族の一員として参入し、家族に基づいてもっとも私的かつ長期的な生活設計を行

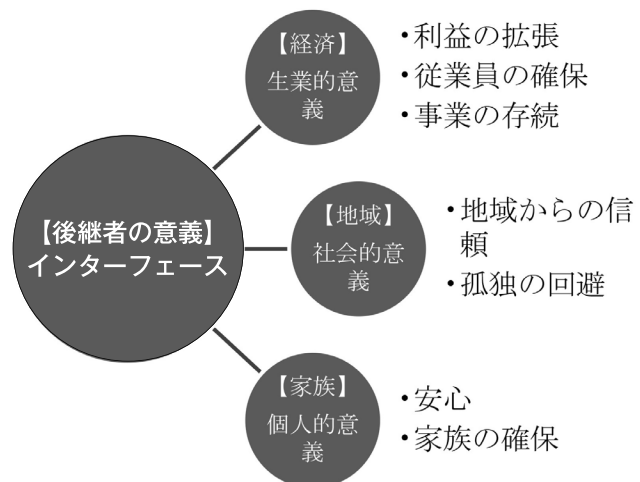


図2 インターフェースの意義 (筆者作成)

う。普通の人間が生まれ、つがい、死ぬことを通じて社会構造が再生産されるという考え方は、経済秩序における「家を運営すること」の側面への関心を強める」という見解が存在する[キース・ハート、クリス・ハン 2017:60]。「家を運営すること」は家族経営を営む世帯では重要な問題であろう。事実、島内では、家族成員から後継者を決め、後継者が家業と家そのものを運営することが期待されている。持続的な家族形成の第一歩は後継者の確保と言えよう。

加えて、観光に焦点を当てると、インターフェースの役割を果たす女性を確保するために観光業が盛んであるという事実が有利に働いている。実際に、島外から結婚により移住した30代の女性(民宿の女将)は「もし島が暗くて、田舎の因習があるようなとこだったら住みたくないかもしれないけど、観光の島ってなってるから、新しい人も来やすいと思う」と述べ、同じく40代の女性(漁師の嫁)も「それこそ私がお嫁に来るときは、「島になんて可哀そう」って親は反対したけど、周りの人が「日間賀は観光地でいいところだったよ」って言うてくれて、親も「それなら」って思ったと思う」と述べた。東海圏において、観光地として知名度を獲得していることが人材確保に対するアドバンテージとなった事例である。

観光事業内で、新たな事業形態や企画立案等を行い、実行するのは若年層が主であり、インターフェースの役割といえよう。また、友人関係や子供の友人の親など、横の繋がりや子供の関係性を生かし、アルバイトを雇用するなど、島内の横のラインを形成することにも一役買っている。これにより、経済活動における生業的意義と地域内での社会的意義を両方担うことになる。そもそも人口流動的とは呼べない島の中で、知人関係を拡大させ、結果的に経済活動の促進へとつなげることは一般的とも言えるだろうが、2000人弱の地域の中で生きていくためには、必要な行動といえるだろう。したがって、第2に地域内での社会的意義をインターフェースが有していると考えられる。

この生産と生活の面について、斎藤[1997]は家族経営農業を調査対象としたアンケート結果の考察より、男性(父親)の方が女性(母親)よりも、生活に関する認識が希薄であり、女性の方が、生産と生活の両方を重要視する傾向にあることを指摘し、今後の家族経営について生産と生活の双方の視点からの改善が必要であると論じている[斎藤 1997:33]。そのため、男性のみが後継者として島内で暮らせばよいものでは無く、女性や、その子供の存在が必要とされている。このインターフェースの存在は家族の生産サイクルの確保が可能となった証ともいえる。

最後に、家族に係わる個人的意義である。これは、個人的な価値観が大きいところだろうが、以下に事例を示しつつ説明したい。筆者がある会の話し合いに参加した際、その会の構成員の選出に際し、「今のところ後継者がいるかどうかで決める。後継者がもういない所には声を掛けていない」との話がでた。また、島内では、島外への転出は秘匿できるものではなく、隠したい情報でも拡散されるものである。前述した事例は、職種や営業形態の差異ではなく、後継者の有無による分類が行われていた事例である。

また、隣近所の家族構成などが知れ渡っているため、家族仲や家庭内の問題は周知されやすい。そのため、「島に取り残されている」「光熱費は(島外に出た)子供が払っている」「(仲が悪く)親子間でもまったく交流が無い」「精神的な病気がある」「子供が結婚していない」など様々な話題が聞き取り中でも確認された。そして、「後継者が共に暮らしている」「(島外にいる息子から)電話が毎日来る」といった家族構成員の確保や交流頻度が高い事が「良し」とされ、一方「1人で島に取



り残された状況」を「何かしらの問題がある状況」として取り扱われ易い。そのため、若年層の家族構成員を確保していることは、閉じられた島という社会の中で地域からの信頼が得られる。また、単純に人々とコミュニケーションを取ることのできる状況が孤独の回避となり、自殺防止にも役立つ。島という海で囲まれた世界において、生きるための協力者を増やす事もまた生きやすさの拡張といえよう。

加えて、自営業者では「大きい声では言えないし、子供のやりたい事があれば尊重したいというのが親心。でも本当は帰ってきてほしい。(家業を)継いでほしい」(40代女性)、「これからのこと(自分たちの老後)を考えると、一緒にいてくれると安心する。でも自分と同じ苦労はかけたくないとも思う」といったように、経営者としての後継者確保という視点と、もう1つ「自分が老いた時に安心できるから」後継者を確保したいという個々人の心情等に関わる部分も確認できた。個人的な心情によって左右される意見であるが、だからといって無視できない部分でもあると筆者は考える。特に、「家業」として経営を行ってきた50～60代の親世代は、子供が20代～30代であるため、後継者確保は経済面から見ても、個人的な感情面から言っても、後継者の確保は自身の生活に直結する現実的な問題であろう。事業の引き継ぎや生活を考え、家族内の世代交代を望む声も大きいことも事実である。

## 2. 結論

後継者と呼ばれる人々は、島外という都会から、島内という田舎へ、島外の知識の伝播するインターフェースとしての役割を担っている。そして、インターフェースのもたらす知識やインターフェースの存在自体が、経済的、地域的、家族的意義として機能し、島での生活持続・生きやすさの確保を創りだすと考えられる。

表3 インターフェースの果たす役割

学歴や専門知識	経営のノウハウ、資格など
身体技能	立ち振る舞い、言葉遣いなど
経験	島外での生活経験、就労経験
外部との対応	時代への対応や新規事業の計画、推進など
家族の維持	新しい世代の確保、子供の確保
労働人口の確保	新しい労働者となる、横の繋がりで労働者を増やす



島外の知識の伝播（島外の価値観や判断力、知識や経験など）

(筆者作成)

また、インターフェースの役割を担う人々が島外から島内へ、生活拠点を移し、島内に島外の情報を伝達し、また、島外からの情報の仲介者として島内で活躍することにより、島外(都会) / 島内(田舎)と明確という2分割が行われる離島において、両世界の断絶が回避できると筆者は考える。インターフェースは、島への移住した人・事業後継者・若年層世帯・婚姻により移住した人々が成り易く、特殊技術・身体技能(標準語、振舞方など)・外での生活経験・単純な後継者の確保などの観点からインターフェースは機能していると考えられる。また、本稿ではインターフェースの存在意義を経済的、地域的、家族的意義の3点で整理した。これにより、島での生活

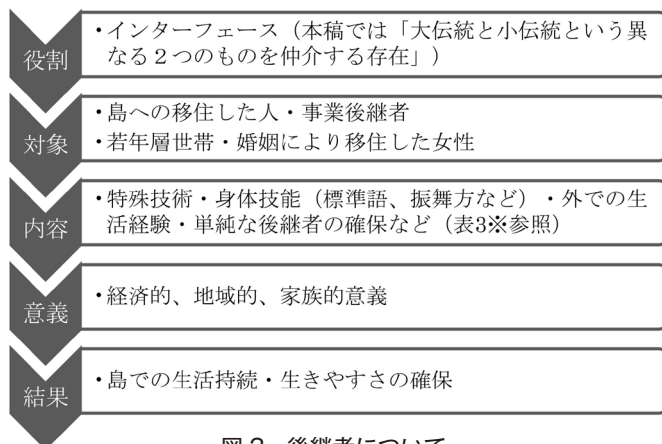


図3 後継者について

持続・島内での生きやすさの確保といった、島で生きるために必要な機能が確保できると考えられる。後継者は事業の継続の側面だけでなく、島全体や島民の生活の維持・促進など、様々な効果を発揮すると筆者は考える。さらに、「島内＝田舎」では自発的に獲得できない「島外＝都会的」な考え方を伝達する存在としても機能していると考えることができよう。

島民の生活に着目し、「この島でいかに生きていくか」を考えた際に、後継者はインターフェースとして島外(都会・外) / 島内(田舎・内)を繋ぎ、図2の通り役割は様々であるが、総じて島外(都会・外) / 島内(田舎・内)という2つの世界観の断絶を防ぐ役割を果たしていると思える。

また、考察の際に、インターフェースの持つ意義について、経済活動における生業的意義・地域内での社会的意義・家族に係わる個人的意義の3つの視点から論じた。従来は、後継者のもつ事業継続の跡取りとしての役割に焦点を当てられる傾向にあった。しかし、実際には、島内という1つの世界で生きていくために多角的な側面からも後継者は必要とされていることが明らかになった。具体的に言えば、島内における集団の維持・形成や単純に島内に家族がいる安心感といったように、極めて個人的な心情にも関わる重要な事柄である。これは、インフォーマントの個人的な問題になるため、統計処理しにくい。従来島内で生きる人々の「寂しさ」「不安感」の解消という役割も後継者は担っていると考えられる。

## VI. おわりに—今後の課題

今日では新型コロナウイルス感染症拡大により、観光業におけるリスクマネジメントが重要視されている。観光地では、ソーシャルディスタンスの確保やアルコール消毒など工夫をし、観光業の再開がなされている。感染症拡大による移動制限や外出自粛という今までにない現象には、地震や台風とは異なる対応が必要であろう。今後は、アフターコロナの観光の中で、インターフェースが島の観光にどのように影響を及ぼすのかをフィールドワークをもとに議論を深めることを課題とする。また、事例に即し、より具体的なアフターコロナ観光の実態を研究課題とした。

## 付記

本稿では、林春伽 2019「インターフェースとしての女性—愛知県日間賀島を事例に」『女性と経験』44, 女性民俗学研究会, pp.61-73, 林春伽 2020「離島における女性の労働と観光—愛知県日間賀島を事例に—」『民俗学会』304, pp.1-34, の成果を一部使用している。また、本稿の内容は、現在(2020年12月5日時点)審査中の博士論文「この島でいかに生きるか」に着目した離島観光に関する民族誌的研究—愛知県知多郡南知多町日間賀島を事例として—」の第6章の内容を踏襲している。加えて、本稿は、2020(令和2)年度日本女子大学大学院学生特別研究奨励金Fの研究費を使用している。

## 注

- 1) 愛知県庁発行資料に記載の無い年度の数値はグラフに反映していない。通常横軸の範囲が定まらないグラフは作成しないが、本稿では大まかな数値の変化を可視化するために、愛知県庁発行資料に記載のある数値をすべて打ち込み、グラフを作成した。また、平成23年度『愛知の離島』以前は季節区分が「3-5月、6-8月、9-11月、12-2月」であるが、平成24年以降は「4-6月、7-9月、10-12月、1-3月」である。表記区分の切り替えに際し、『愛知の離島』のデータが編集されていない。本グラフでは、現在の季節区分を使用した。
- 2) 愛知県庁発行資料に記載の無い年度の数値はグラフに反映していない。通常横軸の範囲が定まらないグラフは作成しないが、本稿では大まかな数値の変化を可視化するために、愛知県庁発行資料に記載のある数値をすべて打ち込み、グラフを作成した。
- 3) 具体的に[青柳 1991], [遠藤 1984], [大泉 1984], [戸島 1996]などがある。
- 4) [林 2020]を参照していただきたい。
- 5) 参考文献では農村社会を前提としているが、現代において田舎と都会という対比に関しては農村と本調査地では遜色ないと考えている。また、本稿で取り扱う「田舎」「田舎者」「無教養」などの言葉は侮蔑的な意味で使用する意図は無く、あくまでも対比の表現方として使用している。
- 6) [林春伽 2020]を参照していただきたい。
- 7) 絞り業は、現在の愛知県名古屋市緑区の一部(旧愛知県知多郡)で中心に生産される絞り染めの名称で国の伝統工芸品にも指定されている。日間賀島の女性は生産工程内の絞り括りを行っていた。非常に手間のかかる作業であるため、かつては周辺地域に住む女性たちの労働となっていた。
- 8) 弘法参りとは、知多四国八十八ヶ所霊場巡りの呼称であり、知多半島を一周する順路をとる。日間賀島には三七番大光院がある。
- 9) 各家庭の経済問題と家族間の問題などのように、3点は完全に分離できるものではないだろうが、本稿では暫定的に3点を独立させて考察を行っている。

## 参考文献

- 愛知県 総務局総務部市町村課地域振興室 1989「観光客数・宿泊能力・宿泊者数の推移」『愛知の離島』 pp.87-88.
- 愛知県 総務局総務部市町村課地域振興室 1993「表15 宿泊施設の状況等」『愛知の離島』 p.26
- 愛知県総務局総務部市町村課地域振興室 2009「5 観光客数、宿泊収容能力の推移」『愛知の離島』 p.45
- 愛知県総務局総務部市町村課地域振興室 2010「5 観光客数、宿泊収容能力の推移」『愛知の離島』 p.45
- 愛知県振興部地域政策課 2017「9. 観光客数、宿泊収容能力の推移」『愛知の離島(資料編)』 p.36
- 愛知県振興部地域政策課 2018『愛知の離島』[http://www.pref.aichi.jp/soshiki/ch\\_iiki/0000088133.html](http://www.pref.aichi.jp/soshiki/ch_iiki/0000088133.html) (2019年9月6日最終閲覧)
- 青柳斉 1991「家族経営における後継者の人材育成」『農業と経済』57(7) pp.48 - 53

- 朝水宗彦 2016「外部人材による地方再生と持続可能な観光」『日本地理学会発表要旨集』公益社団法人日本地理学会,100109.
- 遠藤文則 1984「特殊農業における家族経営の新しい動向－家族経営と後継者問題－」『農業と経済』50(3) pp.38 - 47
- 大泉一貫 1984「特殊農業における家族経営の新しい動向－家族経営の規模と新たな対応－」『農業と経済』50(3) pp.22 - 29
- 落合みどり・小沢雅人・里昭憲・佐藤美津春 1982「新島における観光産業の発展と民宿経営」『学芸地理』36 東京学芸大学地理学会 pp.29 - 52
- 金恵成 2009「家族経営の後継者育成における優位性と存続可能性」『大阪観光大学紀要』9 pp.21-26
- 小林天心 2011「地域自治体と観光行政－地域振興におけるビジョンと観光」『観光学キーワード』山下晋司編 有斐閣 pp.152 - 153
- 白田順士・大村謙二郎・藤井さやか 2012「東京都都心商店街における家族経営型店舗と都市環境変化への対応に関する研究－麻布十番商店街を事例として－」『都市計画論文集』47(3) 公益社団法人日本都市計画学会 pp.715 - 720
- 斎藤一治 1997「女性の側面からみた家族農業経営の課題と家族経営協定の意義」『村落社会研究』3(2) pp.22 - 34
- 知多郡南知多町立日間賀島小学校 1972『日間賀島のすがた』改訂版 知多郡南知多町立日間賀島小学校出版
- 出口晶子 2018「東アジアの木造船文化継承のゆくえ」『国際常民文化研究叢書』12 pp.185 - 205
- 戸島信一 1996「生活様式の変化と家族経営論」『九州農業経済学会農業経済論集』47(2) pp.49 - 60
- 根岸洋・長谷川綾子 2019「男鹿のナマハゲ行事の変容と外部参加者受け入れの動向」『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』9 pp.65 - 79
- ハート,キース・ハン,クリス 2017(2011)『経済人類学－人間の経済に向けて』深田淳太郎・上村淳志訳 水声社
- 林春伽 2019「インターフェースとしての女性－愛知県日間賀島を事例に」『女性と経験』44 女性民俗学研究会 pp.61 - 73
- 日間賀島観光協会公式サイト日間賀島観光ナビ <http://www.himaka.net/> (2019年6月20日時点).
- 宮原暁ほか8名 2015「インターフェースとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」科学研究費女性事業基盤研究(B) (2019年6月14日時点)
- レッドフィールド,ロバート 1960『文明の文化人類学 農村社会と文化』安藤慶一郎訳 誠信書房